

福山大学教育システム

福山大学改革推進委員会
教育改革部会

平成20年9月22日

目 次

I	なぜいま教育改革か	1
II	教育改革の内容	2
	1. 教育目標をいかに設定するか	2
	2. 教育目標を目指したプログラムの開発	4
	3. 新しい教育システムにおける評価と改善	7
	4. 高校教育との接続	9
III	福山大学教育プログラムの基本型	9
	1. 教育目標	9
	2. 教育プログラム	9
IV	おわりに	11
	福山大学改革推進委員会教育改革部会メンバー表	11

福山大学教育システム

教育とは、学習者の行動に価値ある変化をもたらすプロセスである、と考える。教育は学習者主体で行われるべきものであり、教育者は、目標に向かって変わろうとする学習者を支援する役割を担うものである。

I なぜいま教育改革か

大競争時代を迎えた我が国の大学は、大学淘汰の中で生き残りをかけて改革改善に取り組んでいる。大学淘汰を乗り越えるための切り札となるのは教育力であり、教育面での改革改善がいま強く求められている。中央教育審議会でも、このような状況を踏まえて、我が国の大学における学士課程教育の改革改善を強く求める答申を提示したところである。^(注1)

福山大学においては、その創設以来、建学の精神の中で謳われている「全人格陶冶を目指す全人教育」を掲げて、本学独自の優れた教育を推し進めてきた。しかしながら、大学淘汰の中で生き残るためには、更なる教育改革を実行して、学生が確かな実力をつけて卒業できるような全学的な教育体制を整える必要がある。このような観点から「福山大学独自の特色ある全学的教育システム」を新たに構築したいと考える。^(注2) 福山大学独自の特色ある全学的教育システムを構築するために、中央教育審議会答申を土台としながら、福山大学の建学の精神と教育理念を反映させ、本学の教育上の諸課題を克服する方策を探求する。

本学の教育上の諸課題の中でも特に下記のようなことが、新しい教育システムの中で解決を図られるよう期待されている。

☆ 学生の現状に関すること

- 目的意識を明確にさせ、学習意欲をより一層高めるためにはどうしたらいいか
- 学力の多様化にどう対処するか
- コミュニケーション力をどう改善するか

☆ 授業の現状に関すること

- 目標をどのように定めたらいいか
- 学生の授業への積極的な参加をどう引き出すか
- 授業改善に向けて学生と前向きな対話を進めるにはどうしたらいいか

☆ 教育成果の現状に関すること

- 就学期間満了時の各学生に対する教育成果がより一層見えるようにしたい
- 学部学科としての教育成果がより一層見えるようにしたい
- 社会で福山大学の教育成果がどのように評価されているか知りたい

このような課題を念頭に置きながら、以下に示すようなステップを踏んで、本学独自の特色ある全学的教育システムを構築する。

☆ 先ず全学的教育目標を明示し、それに基づいて学部学科ごとの教育目標を設定する

☆ その教育目標を達成するための教育プログラムを開発する

- 教える知識・技能の範囲について検討を加える

態度・志向性に関する教育方法の開発を図る
教育プログラムの中での各授業の役割と位置づけを明確にする
学生の学習意欲を引き出す授業形態を工夫する
授業内容の改善に努める

☆ 教育プログラムにおける成果の評価と改善の方法を探る

学生の成績評価方法を改善し、学習成果がよく見えるようにする
教員の教育に対する考え方を進化させるための討論・研修を行う
教育プログラムの評価と改善を行うためのシステムを開発する

以下、この手順に従って本構想を説明する。

(注1) 「学士課程教育の構築に向けて」(中央教育審議会大学分科会制度・教育部会、2008.03.25)

(注2) 今回の教育改革は学士課程教育(学部教育)に限定し、大学院教育の改革については今後検討予定。

II 教育改革の内容

1. 教育目標をいかに設定するか

年度終了時や卒業時に、どのような実力を福山大学の学生につけさせたいと考えるかを、「教育目標」として具体的且つ明確に示す。それは、期待される「教育成果」でもあり、また学習者の側から見れば「学習成果(Learning Outcome)」でもある。教育目標は、福山大学の教育理念、福山大学卒業生に対する社会の要請、大学院進学のために必要とされる基礎的学力などを十分検討して決められるべきものである。この全学的教育目標を指針としながら、学部学科ごとの教育目標を設定する。これらの教育目標は全てウェブサイトに公表するのが望ましい。

本節では、教育目標を定めるに当たっての我々の考え方を述べ、その考え方に基づいて設定された全学的教育目標はⅢ章で示す。

現代社会では、変動を続ける社会の問題を自ら発見し、それを探求し、解決して、社会の改善に貢献することのできる人材や、そのために必要な新しい知識を自ら学習し続ける人材が求められている。その中で、学士課程教育のあり方も変革を迫られている。福山大学では、時代の要請に応えた学士課程教育を構築し、現代社会に立ち向かうことのできる人材を育成することを目指したい。このような人材を育てるためには、学生が卒業後に必要とする知識の範囲を明確化し、それを獲得できるような徹底した教育システムを確立することが前提となる。それは、教える知識の内容とその知識の活用という二つの観点から考える必要がある。

第一に知識の内容について。現代は、急速な技術の進歩に伴い、社会環境はめまぐるしく変化している。そこでは、その変化を逐一追ってその局面のすべてに亘る知識を網羅的に教えていくというよりは、そのどの局面にも通用する知識のエッセンスを絞り込み、これを徹底して身に付けさせることがより重要である。現代の学生には、多くを知っていることよりは、使える知識を広く知っていることがより必要とされている。ここ

での知識のエッセンスとは、知識の実際的な活用の際に必須の知識ということである。つまり、ここでいう「専門的な基礎知識」とは、専門分野における初級の知識という意味ではなく、社会における実際の知識活用の面から、そのエッセンスを絞り込む作業を経て初めて成立する高次の概念である。

第二に知識の活用について。学士課程教育においては、前述のような知識のエッセンス獲得の上にとって、その知識の活用力（創造的活用力・課題探求力・学習力）の育成を最終目標とする。そのためには、社会をより良くしようとする意欲、現実を変えていく自由な発想力、手強い現実に取り組むねばり強さ、組織を動かす説得力、これらの総合的な力、すなわち人間力が養われる必要がある。

このような力を身に付けさせるには、講義中心の受動的な授業形態だけでは不十分である。何らかの現実的な課題の下に、学生がこれに実際に取り組むことを通して初めて前述のような力は身に付いていくからである。つまり、学生が自ら問題を発見し、自ら取り組み、教師はそれを支援するといった実践的な授業を導入することが不可欠である。ただ、こういった授業形態を導入するためには、二つの問題点がある。一つは、実践的な授業における学習成果の評価をどうするかということ。もう一つは、実践的な授業は、教員も学生も授業外にそのための特別の取り組みを要するという点。この二つの問題点を解決することは、教育システム構築の核心にもつながると考えられる。

このような実践的な教育システムを導入するためには、学士課程教育を、専門教育を完成させる場とみなす従来の考え方から、専門分野を学ぶための基礎教育という考え方に切り替えることが必要である。網羅的、体系的な知識の学習、つまり講義中心の教育から、基礎知識、すなわち知識のエッセンスの獲得と知識の活用というところに重点をシフトさせた教育への移行である。そこで重要な点は、成績評価システムの導入である。特に実践的な授業の実施について消極的な意見の中には、そういった授業の学習成果がえてして曖昧に流れ、成果を上げ得ないという考え方がある。そのため、これら実践的な授業における学習成果の評価と、学習成果全体の評価方法を同時に確立する必要がある。その際、学習成果（Learning Outcome）は、具体性があり、内容に意味があり、評価可能でなければならない。

以上のように、時代の要請にあった学習目標とそれに応じた教育方法、その学習成果の評価という一連の教育システムを整えれば、学生には、知識のエッセンスの徹底した獲得とそれらのエッセンスを自由自在に使いこなして新しい局面に取り組む応用力と、新しい知識を自ら獲得できる学習力を身に付けることが保証されると考えられる。これらの力がいわゆる「学士力」である。この力を身に付けていれば、学生が卒業後の半生を、学士保持者としての働きをなし、より良く生きていくに十分な力が養われるはずである。つまり、それが学士課程教育の最終目標である。それは、また、福山大学の教育方針の根幹「全人教育」「理論と実践の均衡」といった内容を実質化させることでもあり、また社会一般にいわゆる「社会人基礎力」の涵養にもつながっていくと言える。

教育目標を構成する要素として次のような事項が考えられる。

☆ 知識・理解

人文社会自然科学など広い範囲での基礎的知識・理解（注3）

専門分野における基礎的知識・理解（注3）

☆ 汎用的技能

読み・書き・話す能力

数量的な情報処理の能力

ITを使用した情報処理と情報リテラシーの活用力

論理的思考力・応用力・総合力・評価力

☆ 態度・志向性

自己管理能力

集団の中でのリーダーシップ能力

社会参加のための能力

生涯学習力

倫理的・人道的判断力

これらの事項をそれぞれ詳しく吟味した上で、全学的教育目標及び学部学科の教育目標が設定されねばならない。

(注3) 「基礎的知識」の範囲は、各学部学科で専門の実情に応じて設定する。

2. 教育目標を目指したプログラムの開発

教育目標が明示されれば、その目標に向けての教育プログラムを編成しなければならない。ここで、教育内容の全般的な計画のことを教育課程（カリキュラム）とよび、教育課程の進行状態についての順序・組み合わせ・筋などをまとめたものを教育プログラムとよぶことにする。

今回我々が目指している教育改革は、本学の教育課程（カリキュラム）そのものを見直そうとするものであるから、全学的な教育計画の変革をもたらすものである。しかしながら、あまりに根本的な部分で不必要な変更を加えることによって、無用の混乱を引き起こすのも得策とはいえない。そこで、今回は、教育計画の変更は必要最小限にとどめ、教育プログラムの開発に全力を集中することとしたい。

教育プログラムの開発にあたっては、明示された教育目標を達成するために、授業が最も合理的且つ効率よく配置されるよう配慮されねばならない。配置されるべき授業そのものにも十分な工夫が凝らされ、学生自身による研究を促すなど、従来の授業では達成不可能であった成果が期待できるようになっているのが望ましい。そのような工夫・改善は、以下の3点に分けて考えることが出来る。

☆ 既成の制度内での改善

・知識の獲得について

教えるべき知識の範囲の見直し

知識の効率的な獲得方法の工夫・改善

・技能の獲得について

教えるべき技能の見直し

方法論に基づいた実験的授業とその効果についての評価

★ 既成の制度の見直し

各授業の詳細な実施計画を記載したシラバスは、本学では、すでに年度ごとに学生に公開している。その内容、公表方法などは現状のままでいいだろうか。新たな教育プログラムを開発する時期に合わせて、シラバスのあり方も再検討する必要がある。本学の学期区分は、通年性の前期・後期制をとっている。しかしながら、授業実施上は通年授業の形態をとらず、学期ごとに完結して単位取得が出来る形態をとっている。この意味では、すでにセメスター制が採用されているということが出来る。この実質上のセメスター制を、より実効性のあるものにしていくかどうか、この機会に検討する必要がある。

本学では、学部ごとに、年度内に学生が取得できる単位数に制限を設けている。すなわちキャップ制である。これについても、この機会に検討を加える意義があると思われる。

近年の留学生の増加や社会人教育のニーズの高まりを考慮すれば、教育プログラムの中でも、このような新しいニーズに対応する方策を早急に検討すべきである。

これらの諸問題以外にも、すでに実施しているいろいろな制度についてこの機会に再検討を加える必要がある。

★ 新たなシステムの導入

・ 態度と指向性の獲得を目指した教育

従来から行われてきた知識・技能の獲得を目指した教育に加えて、態度・志向性の獲得を目指した教育を取り入れるべきである。専門分野の問題を通して態度・志向性の獲得を図る教育システムを作り上げるよう、各学部・学科で工夫する必要がある。

・ 講義以外の授業形態

学習者が能動的に学ぶことが出来るアクティブ・ラーニング（AL）、学生参加型授業（双方向的な授業、討議など）、スモール・グループ・ディスカッション（SGD）、問題探求・解決型授業（PBL：Problem Based Learning）、社会奉仕体験活動、教室での学習と地域社会における実践的活動を結びつけて学習するサービス・ラーニング（SL）、フィールドワーク、学生が在学中に就業体験を積み学習の一助とするインターンシップ、海外体験学習、海外留学等々、教育プログラムを開発する際に取り入れていくべき新たな授業形態は多様である。ここで指摘しておきたい問題点は、福山大学内の講義室や演習室などが、従来型の一方向型授業を想定して作られており、ここで述べたような新たな授業形態を取り入れるためには障害となりうるということである。教育プログラムの開発と同時に、このようなハードウェア面での改善も平行して行う必要がある。

・ 専門教育へと連動させるシステムの構築

共通教育と専門教育ははっきりと区分されるべきものではなく、両者はなめらかに自然とつながられねばならない。そのためには、共通教育担当者と専門教育担当者の間で、建設的な検討会が常時もたれる必要がある。

・ 学生の事前学習の制度化

学生に事前学習を習慣づけるためには、強制によるのではなく、学生の学習意欲を引き出し、学生が自ら事前の調査研究を行い、授業に前向きに参加するような体制を

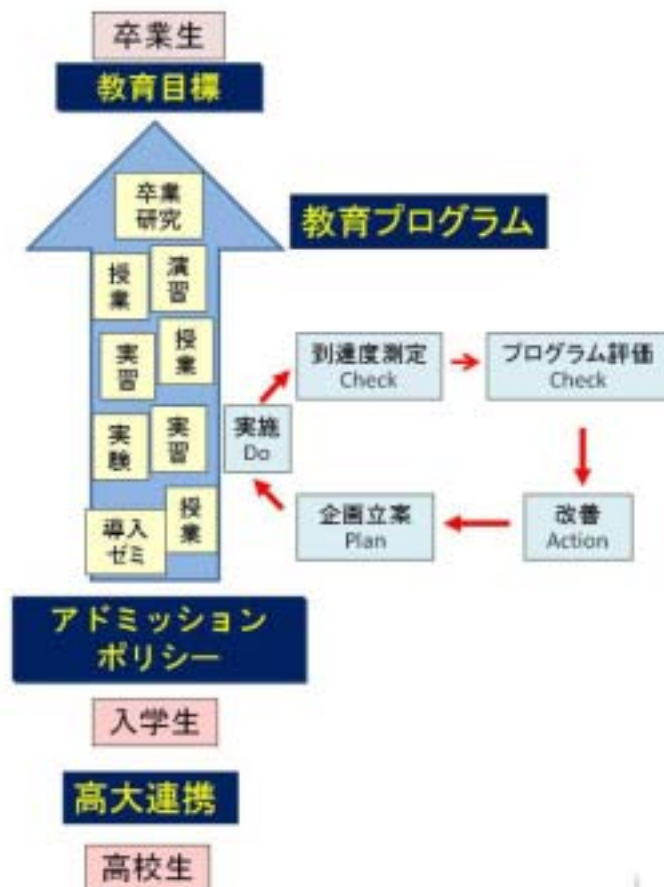
工夫する必要がある。そのためには、カリキュラムの見直し、シラバスの改良、ティーチングアシスタント（TA）の強化などが図られる必要がある。

・補習授業（リメディアル教育）

入学生の多様化はますます進んでおり、学科で要求される予備知識を必ずしも備えていない学生も多いし、仮に高等学校段階で必要な授業をとっていても、それを十分に大学教育の中で生かせない学生も多い。このような学生のために補習授業は欠かせないものとなりつつある。福山大学の卒業生が、社会に巣立つときに、自信を持って羽ばたけるよう、大学の授業の中で補完できることは補完しておくべきである。

これらの留意点を考慮しながら、先ず、大学全体としての教育プログラムの基本型を作成する（Ⅲ章参照）。この基本型は大学全体の一般論であるから、この基本型を土台にしながら、各学部・学科は、それぞれの分野に固有の事情も考慮しつつ、教育プログラムの具体型を作成する。（注4）

（注4） この教育改革構想においては、学士課程教育全般に対する改革案を提示している。学士課程教育の中でも、共通教育（一般教育）の部分は、より具体的な検討を必要とするので、共通教育PT（Project Team）において、別途構想を策定中である。



3. 新しい教育システムにおける評価と改善

評価は、教育・学習という教育活動全体を前進させる原動力として適切な方法でなされる必要がある。教育の場では、教師と学生が授業という同じ土俵で、同じ目標を持って、ある期間共に活動するのであり、そのお互いの目標がどこまで達成されたかを知りたいと考えるのは当然である。これまでやってきたことがどこまでできたか、どこができていないかを知ることは、次への活動の意欲を生む。また、それだけでなく、教育活動の効率化、正常化など教育活動全体を見直し、活動成果をより高めるための過程として是非とも必要である。そのような前向きな評価をするためには、活動の成果を両者にとって公正な方法で計り、お互いにとって適切な方法で知らされることが必要である。大学の教育全体を考えれば、活動者（学生、教師、TA、職員など、教育活動に関わる者）ごとの評価方法の設定が必要だと考えられる。

以上述べたような、目標に向けた達成度の評価は、それを受け止める側の違いによって、下記のおよそ三つの視点に分けることが出来る。

- ・学習者の視点： この教育プログラムの下で、学生が目標に向けた達成度をいかにあげたかを知るための成績評価と、それに基づく学生自身の改善努力

- ・教育者の視点： 教員の教育に対する考え方がいかに進化したかを知るための評価と改善（研修）

- ・教育プログラムの視点： 教育プログラム自体が目標に向けた最良の仕組みになっているかどうかを検証するための評価と、評価結果に基づくプログラム改善

どのような評価を行うにせよ、評価の結果が真摯に検討され、新たな改善につながっていったこそ意味がある。教育プログラムを企画し(Plan)、実施し(Do)、実施結果を評価し(Check)、評価結果に基づいて改善する(Action)という、いわゆるPDCAサイクルを機能させるよう検討を重ねることが今後の課題となる。

以下、上で述べた三つの視点に立った評価について個別に検討を加える。

☆ 学生の成績評価

学生の学習成果を見るための成績評価は、従来から、優、良、可、不可などの基準を用いて実施されてきている。新しい教育システムにあっては、成績評価はどうあるべきであろうか。

第一に、知識・技能・態度に応じた学習成果の評価方法を整備することが必要である。知識・技能・態度については、客観的な計測が可能な場合と、標準的な基準による主観的な評価を複眼的に行う必要がある場合とに分かれる。特に実践的な授業に関しては、全学共通の基準を設定し、評価者を多面的に設定して客観性をより高める工夫をすることが必要となる。評価シートの作成、評価者の設定、評価時期の設定、成績評価の表現方法などを決めなければならない。^(注5)

(注5) 成績表示の具体的な方法については、従来から行われている「優・良・可・不可」方式で特に支障はないと考えられ、これについて特段の検討はここでは加えない。

第二に、前期・後期、学年終了時、あるいは卒業時の総合的な成績評価方法を明確にすることが重要である。各授業毎に出された成績を総合した上で、どのように評価する

か、その方法と表現の様式を提示することが必要である。例えば、小中高の「通知票」のような評価シートの作成（ポートフォリオ）などが考えられる。これにそれぞれの科目が学習目標ごとに整理されていれば（例えば、知識力はあるが、活用力に欠ける、といった）、成績の分析が可能になる。また、学生の総合的な学習成果を知るための指標として、Grade Point Average（GPA）のような指数を取り入れることも検討すべきであろう。現在の成績表は、カリキュラムの科目の分野構成ごとになっており、学生の学習成果ごとの表記になっていない。卒業単位の充足という観点でのみ作られている。これに、前述の学習成果ごとの評価を記した副次的なシートがあると、学生の達成度がわかりやすくなる。

第三に、成績評価フィードバックの方法についての設定が必要である。これは、第二の点とも関連があるが、成績評価結果が新たな活動へ展開することを促進するような方策をこのシステムに組み込む必要がある。現行の半期毎の授業では、期末に行った試験やレポートの採点結果は個々の教員が意図して行わなければ、その評価を学生にフィードバックする機会がない。学生の成績評価を学生自身にフィードバックし、学生の勉学上の改善を促す方策を工夫する必要がある。また、前期・後期、学年修了時の総合的な評価についても同じ事が指摘できる。

第四に、卒業時の成績評価については、特別な大学全体の基準を設定する必要があるかもしれない。この観点から、GPA の導入について前向きな検討が急がれる。建学の精神を考慮した基準を考えることも可能ならしめるべきであろう。

★ Faculty Development (FD)

全学的な取り組みとして現在実施されているFDは極めて有効であり、よく整備されている。この進捗度を更に加速し、実りあるものとしたい。

また、大学全体としてのFDへの取り組みの他にも、各学部や学科単位でFD活動が行われることが望ましい。例えば、学生による授業評価の結果を学科ごとに検討し、それぞれの授業の改善に結びつけ、いかに改善されたかを教員は学生に分かるように示す必要がある。また、授業公開を通じた相互評価などにより、授業改善への取り組みを進めることが出来る。

★ 教育プログラムの評価

学生の成績（達成度）の平均値を授業ごとに定期的にまとめ、この結果を分析評価することによって、目標に向けて全体的な進歩が見られるかどうかを知ることが出来、教育プログラム自体が、学生の実力や能力を伸ばすために機能しているかどうかを判断することが出来る。これ以外にも、教育プログラム自体が社会の流れに沿っているかどうか、学生達の希望に合致したものになっているかどうか、など、改善に向けてのプログラムの評価をすることは極めて重要である。福山大学の教育プログラムが環境の変化に対して柔軟に対応しうる自己成長型のプログラムとなることが望ましい。教育プログラムを企画し(Plan)、実施し(Do)、実施結果を評価し(Check)、評価結果に基づいて改善する(Action)というPDCAサイクルが機能することによって、自から成長していく教育プログラムを実現することが出来ると考える。教育プログラムの評価・改善体制を整備することは、本学にとって今後の大きな課題である。

4. 高校教育との接続

- ・アドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）の明示

福山大学は、入学生に対してどのような期待を持っているか、入学者像はいかなるものかを明示し、受験生に対して明確なメッセージを送る必要がある。

- ・入試制度の再検討

福山大学のアドミッション・ポリシーに基づいて、入試制度のありかたを全般的に再検討し、見直しが必要なものについては大胆に見直し、新たな独創的入試形態を生み出す必要があるれば、新たな工夫をすることも必要であろう。

- ・入学時教育

高校教育と大学教育との落差を出来るだけ緩和するために、入学前教育や初年次教育について新たな工夫が必要である。

- ・高大連携

すでに多数の高等学校と連携協定を結んでいるので、この協定を活用した高校との連携事業はますます活発化させる必要がある。

Ⅲ 福山大学教育プログラムの基本型

現代社会では、変動を続ける社会の問題を自ら発見し、それを探求し、解決して、社会の改善に貢献することのできる人材や、そのために必要な新しい知識を自ら学習し続ける人材が求められている。福山大学では、時代の要請に応えた学士課程教育を構築し、現代社会に立ち向かうことのできる人材を育成することを目指したい。このような人材を育てるために、教育目標を明確にし、福山大学教育システムの根幹をなす教育プログラムの基本型を提示する。各学部・学科は、この基本型をもとにして、学部・学科の分野的特徴などを加味しながら、それぞれの具体的教育プログラムを策定する。以下では、その作業の基礎となる「全学的教育目標」を提示し、「教育プログラムの基本型」を図示する。

1. 教育目標

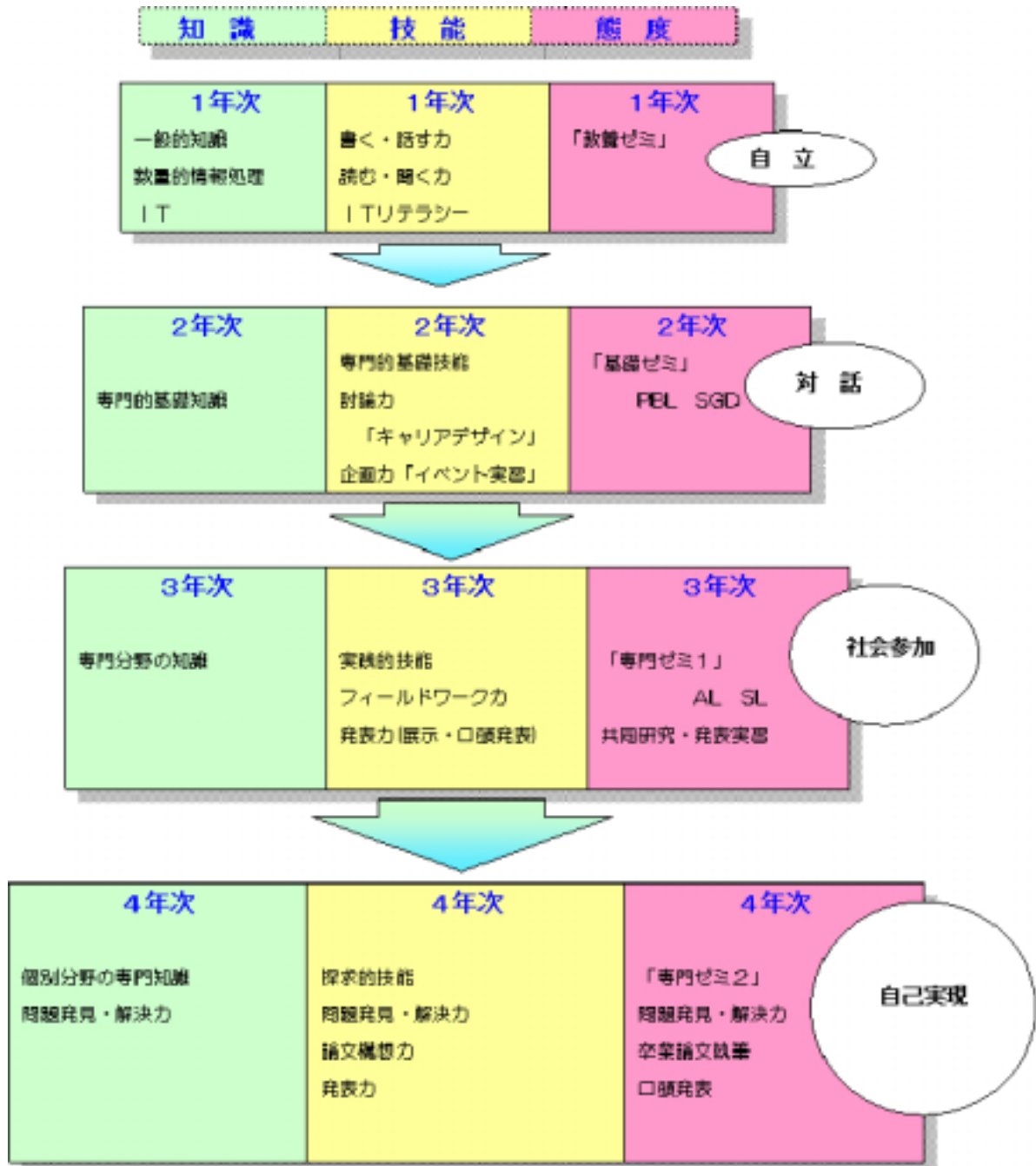
現代社会に立ち向かうことのできる人材の育成に努める。そのために、一般教育（共通教育）分野並びに専門教育分野における基礎的な知識を習得し、読み・書き・話す能力、数理的論理的思考力、情報リテラシーの活用力を身につけ、自己管理能力やリーダーシップ能力を有し、倫理的・人道的判断力を持ち、社会参加のための能力を持った人材の育成を図る。

2. 教育プログラム

全学的な教育目標に向けた教育プログラムの基本形を以下に図示する。（4年間のプログラムとなっているが、薬学部の場合は6年間として読み替えること。）教育プログラムに含まれる授業は、「知識」に関するもの、「技能」に関するもの、「態度」に関するものに分けられている。このそれぞれの範疇で養われるべき力を年次ごとに示した。

また、これらをマスターすることによって確立すると考えられる人間形成の段階が右側に示されている。

各学科の教育プログラムは、ここに示されている諸事項に対応して、学科の分野の特殊性を反映した具体的な授業配置によって構成される。



PBL : 問題探求・解決型授業 (Problem Based Learning)

SGD : スモール・グループ・ディスカッション

AL : アクティブ・ラーニング

SL : サービス・ラーニング

IV おわりに

Ⅲ章で示した教育目標と教育プログラムの基本型を参考にしながら、各学部・学科では、それぞれの教育目標を設定し、その目標に向けて授業を配置した教育プログラムを整備する作業に取り掛かることとなる。この作業は、現行の学生の時間割との関連もあり、経過措置に十分な配慮が払われなければならない。各学部・学科では、今回の教育改革を完了するために、どのくらいの時間を要するのかを判断し、教育改革の年次計画を作成するのが望ましく、その計画は、各学部で毎年度作成する年度計画書に記述されていなければならない。

大学の使命は、知的文化の創造であり、その継承であり、その活用である。言い換えれば、研究と教育と社会貢献にあるといえる。このように、大学における教育の特色は、それが研究に裏付けられているところにある。活発な研究が行われる優れた大学においては、自ずから、独創的で特色ある優れた教育が行われるものである。

本構想で述べた教育改革においても、優れた研究の存在を前提としていることはいうまでもない。しかしながら、教育の手法について考えれば、優れた研究がありさえすれば自然に得られるというものではなく、意図的な工夫によって教育手法を改善し、より効果的な教育を行うことが出来るようになる。本構想では、まさにこの部分に焦点を当て、多様化した学生達により一層適した教育体制はどのようなものであるべきかを考察した。

福山大学の未来は、教育力の強化にかかっているととっても過言ではない。今回の教育改革を、学習者（学生）の立場に立って実りあるものとする事が出来れば幸いである。

福山大学改革推進委員会教育改革部会メンバー表

牟田泰三、嶋田 拓、富士彰夫、青木美保、香川直己、松浦史登、鶴田泰人、岡崎文憲、栗栖良光、牧野光良